

婦人と子ども

夏の幼稚園

第十二卷第七號

東京女子高等師範學校教授

藤井利譽

一、大人でも堪らない。

盛夏三伏の苦熱。大人でさへ堪へ切れぬ。況んや幼児をやである。幼児は案外暑さには抵抗力強く随分暑い中を平氣で走り廻はつて居るが、此の間、於ける保育者は餘程細心の注意を要すると思ふ。幼稚園が大切であるといふ一念から、暑いく臭苦しい往來を流汗淋漓、通園を敢へてせしむるが如きは如何であらうか。鍛練の必要、論はないが、ンは發達程度に合せねばならぬことも亦論がない。これを思はずして徒らに鍛練を口にするが

如きは軟弱なる植物を炎暑に曝すと同様枯死せしめずば幸である。一體春より夏にかけて幼児の發育は盛なる時期であるといふことであるが、それは彼等の生活を最も都合よからしめての上のことである、燬くが如き炎天に長時間放置したり、臭苦しい部屋に多數押し込めて置いたりしてはどんな強健な幼児でも堪つたものでない。

二、思ふ存分休養せしめよ。

幼稚園が蒙る批難の一つ、しかも最も大なる批難の一つは其の與へらるゝ刺激が餘り多過ぎると

いふことである。之が爲に神經質の、色の青ざめた、コセ／＼した人間たらしむるに至らしめ。幼児固有の活力を減耗し、天真を缺き、無邪氣な性格を失はしむることがあるといふことである。自分も幾分かしか感ずる節があるのである。幼稚園より来た兒童は我儘である、不規律である、悪い癖がある等の批評を屢々聞くのであるが、此種の弊は自分は餘り氣に止めぬ一人である。ンナことは時の進むに連れ、發達に伴ひ、自制的の生ずるに至らば自然と矯正の出来るものであると思ふからである。彼の教科の學習に興味を持たぬなどといふに至つては小學教師の方で餘程考ふべき點があると思ふ。幼稚園でやつて／＼知り抜いて居るものを復た繰返へして教へる如きことがあつては兒童の努力や興味を買ひ得ぬのは當然であらう。此の點について小學教師は今少し幼稚園の實際を知らねばならぬと思ふ。但し保育其の

法を誤り小學校教育の豫備をなすことに腐心し却つて惡結果を醸すが如きは又保育者の注意すべき所である。自分は痛切に思ふ。

「幼稚園教育は幼兒身體の健全なる發育を遂げしむることに最も大なる注意を拂ふべきである」と。此强健とは唯筋骨の良好なる發達のみでなく、全身の調理的發達、神經の結合作用の最も確かな敏活な、意地の強い、活動の盛なるものを意味するのである。此の意義よりして夏期には思ふ存分に休養せしめよと言ふのである。

三、休養は休止ではない。

活動は幼兒の天性である。職分である。幼兒活動の休止は死と睡眠とのみであらう。夏期に於ける幼兒は如何に活動せしめたが良いか。適當なる誘掖指導の下に涼風を趁ひ、綠蔭を尋ねる、休養の最良案であらう。されど這般のことは少數人士に限らるべきもので、多數は夏季休業となれば

幼兒の仕末に困るのである。

都會の比較的の上流者の子女を收容せる幼稚園は、長き休暇を設けて其の間は全然家庭に任せざるを得策と思はるゝが、最も此の際、豫め保育の心得を家庭に指示すべきは必要である、併し都會でも中流以下の子女を預るもの、又は村落の幼稚園は必ずしもこれと同様の取扱は出来ぬ、否、しかせねば却つて良いと思ふ。

四、幼稚園を開放せよ。

兒童幼兒等の爲に學校若くは幼稚園を開放するの必要なるは平日に於ても然りであるが、特に夏季に於ては必要と思ふ。都會は勿論であるが、村落でも幼兒兒童の爲に最も適當なる運動場は缺乏して居る、或は村落には山あり、川あり、以て幼兒の遊園たり得べしと言ふものあらむ、然れど指導なき運動、補助なき遊戯の却つて幼兒に有害なる所以を思はひ、唯之を自然に放置するが如きは

吾人の忍ぶべからざるところである。夏季炎暑の時の如きは到底規則正しく日々の教育の行はるべきものではないが、幼兒は或は子守に伴はれ、或は年長兒童に従ひ、此の開放されたる遊園に來りて、或は戯れ、或は憩ひ以て十分なる快樂と休養とを得せしめ一は以て休暇中の養護を輔け、一は以て平素保有の效を定しくせぬことともなると思ふ。此の場合に於て何人か責任者のあるありて幼稚園の管理に任ずると同時に遊戯運動を指導し、時には涼しき室なり、樹蔭なりに於て面白い話を聞かせることなどは必要であらうと思ふ。故に學校又は幼稚園は常に之の施設を適當にし、特に夏季に於ては其の利用を完うすることに努めたいものである。かくの如き用意はやがて最も健全に最も敏活に働く身體と精神とを有する幼兒を作り、延ひて學校教育の眞の準備を爲すであらうと信ずる。